

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Mood of adjectival predicates in Japanese

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福田, 嘉一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2559

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



名詞修飾述語の叙法

福田 嘉一郎

1. はじめに

本稿では、これまで取り上げられることが少なかった名詞修飾述語の叙法について論じ、名詞修飾述語においては「想定」という叙法を認めるべきであることを主張する。想定は、命題が真である蓋然性について話者（あるいは話者が視点を寄せる人物）が何らの判断も示さない叙法であり、確言の叙法形式と同じ形態の形式によって表わされる。さらに本稿では、次の(i) (ii)を明らかにし、(iii)を予想する。

- (i) 名詞の指示特性が未知の不定である場合、その名詞を修飾する述語の叙法は必ず想定となる。
- (ii) 名詞の指示特性が特定の不定である場合、その名詞を修飾する述語の叙法は想定とはなりえない。
- (iii) 想定は主節述語の（発話時における）叙法としては基本的に認められず、名詞修飾述語の叙法が想定である場合、その述語は必ず主節時を基準とする相対テンスをとる。

2. 「ないものはない」の両義性とその理由

北原 (1981: 257ff.) は、「「～は」は既知の情報を表わし、「～が」は未知の情報を表わす」(p. 257) として、「A は、B」という表現を(1)または(4)のように図解し、「A が、B」という表現を(2)または(3)のように図解している。

- (1) 既知 は 未知: 「^A私は ^B山田です」「^A太郎は ^B花子に文法を教えました」
「^A花子に文法を教えたのは ^B太郎です」
「^A太郎が花子に教えたのは ^B文法です」
- (2) 未知 が 既知: 「^A私が ^B山田です」
「^A花子に文法を教えたのが ^B太郎です」
「^A太郎が花子に教えたのが ^B文法です」
- (3) 未知 が 未知: 「犬が走っている」「雨が降っている」
「昔々、ある所に、おじいさんとおばあさんがありました」

- (4) **既知** は **既知**: 「どうせ日本人は 日本人だ」「バカは バカだ」
「広いことは 広い」

そして、北原 (1981) は次のように述べている。

ところで、

ないものはない。

という表現がある。これには、

(a) 欠けているものではなく、すべてある。なんでもある。

(b) 元来ない物は、どう思案してもない。

の二つの意味がある (『日本国語大辞典』による)。[略] この二つの意味の関係について考えてみると、(a)は、「ないもの」(既知) について、あるかないかの新しい情報 (未知) を示しているもので、(1)の型で解釈したものであり、(b)は、「ないもの」(既知) について、それはないものといっているようにないのだと既知の情報を確認しているもので、(4)の型に解釈したものである。この表現の「は」を「が」に変えた、

ないもの (項目) が ない。

は、普通、(a)に相当する意味に解釈される。それは、(3)の型で解釈したものである。

この事典には、ない項目がない。

で、「ない項目がない」全体が未知の情報である。

(北原 1981: 261-262)

北原 (1981) の主張に従えば、「ないものはない」という両義的な文がどちらの意味に解釈されるかは、文末の「ない」が「未知の情報」を表すか、「既知の情報」を表すかによって決まるということになる¹。しかし、(a)の場合の「ないもの」と(b)の場合の「ないもの」とが同一であるなら、同一の「ないもの」を受けて「未知の情報」でも「既知の情報」でも叙述しうるとは考えにくい。(1)の型の例「私は山田です」の「山田です」が「既知の情報」を表すことはなく、また、(4)の型の例「どうせ日本人は日本人だ」の「日本人

¹ 北原 (1981) の言う「既知の情報」「未知の情報」は、文中の要素に情報の焦点が置かれているか否かと、聞き手が既に当該の情報をもっているか否かとを、部分的に混同している。「既知の情報」は焦点のない情報、「未知の情報」は焦点情報ととらえるべきものであり、「A は、B」においては(4)の型の場合でも B に焦点が置かれている。ただ、(4)では B を聞き手が既に知っているか見込まれる点が(1)の型と異なる。

だ」が「未知の情報」を表すことはない(もちろん、「私は山田です」「どうせ日本人は日本人だ」などの文に(a) (b)のような両義性はない)。

筆者は、北原(1981)の(a)の「ないもの」と(b)の「ないもの」とは同一でないと考える。まず、「ない₁ものはない₂」の文末の「ない₂」が「既知の情報」を表すとされる場合((b)), 文末の「ない₂」と「ない₁もの」の「ない₁」とは、文法的意味を同じくする。すなわち、「ない₁」の「-い₁」も「ない₂」の「-い₂」も、ともに命題「ものがな₁」「ものがな₂」が100パーセントの蓋然性をもって真であると話者が判断する叙法²(確言 *Indicative Mood*)を表わしている。他方、「ない₁ものはない₂」「(この事典には) ない₁項目がない₂」の文末の「ない₂」が「未知の情報」を表すとされる場合((a)), 文末の「ない₂」と「ない₁もの」「ない₁項目」の「ない₁」とは、文法的意味を異にする。すなわち、「ない₂」の「-い₂」が命題「ものがな₂」「項目がな₂」についての確言を表わしているのに対して、「ない₁」の「-い₁」は、命題「ものがな₁」「項目がな₁」が真である蓋然性について話者が何らの判断も示さない叙法を表わしている。ただそれが「ない₁」ということ話を話者が思い描いただけの「もの」「項目」を受けて、文末で「ない₂」と叙述したために、結局「ものがな₁」「項目がな₁」は真ではなかったことになる(「すべてある」「あらゆる項目がある」)。

3. 名詞修飾述語の叙法「想定」と被修飾名詞の指示特性

3.1 名詞修飾述語の叙法「想定」

第2節で、「ないもの(はない)」「ない項目(がない)」の「ない」のような名詞修飾述語においては、命題が真である蓋然性について話者が何らの判断も示さない場合がある(北原1981の(a))ということを指摘した。そのような場合の叙法を「想定 (*Subjunctive Mood*)」と呼ぶことにする³。

想定の名詞修飾述語の特徴として、同じ命題の確言の述語を主節に持つ文を前提と見なすことができない。(5a) (6a)は、(5b) (6b)の前提として、いずれも不適格な文である。

(5) a. #(そこに) 何かがない₁。

² 現代日本語における主節述語の叙法 (Mood) とそれを表す形式については、福田(2019: 27-45)を参照されたい。

³ 「語り」においては、話者である語り手が視点を寄せる人物の述べ方を表す場合もある。

- b. ない₁ものはない₂。[欠けているものはなく、すべてある。なんでもある]
- (6) a. #この事典に何かの項目がない₁。
 b. この事典には、ない₁項目がない₂。

名詞修飾述語の叙法は、むしろ確言の場合もある。ただし、確言を表す叙法形式と、想定を表す叙法形式とは同じ形態をとる。名詞修飾述語の叙法が確言である場合は、命題を同じくする確言の文を前提と見なすことができる。(7a) (8a)は、(7b) (8b)の前提として、いずれも適格な文である⁴。

- (7) a. (そこに) それはない₁。
 b. ない₁ものはない₂。[元来ないそれは、どう思案してもやはりない]
- (8) a. (どこかに) 何かがない₁。
 b. ない₁ものはない₂(し、あるものはある)。[一般に、元来ないものはどれも、どう思案してもない(し、元来あるものはどれも、どう否認しても存在する)]

(5b) (6b) (8b)の名詞「もの」「項目」の指示特性は任意の不定(「あらゆる～」)、(7b)の名詞「もの」の指示特性は定(「その～」)である⁵。(5b) (6b) (7b) (8b)は、それぞれ(5'b) (6'b) (7'b) (8'b)のように解釈できる。

⁴ (5b) (6b)と(7b)との違いを、制限的修飾 (restrictive modification) と非制限的修飾 (non-restrictive modification) の違いとして説明することも考えられる。(5b) (6b)は制限的修飾の例、(7b)は非制限的修飾の例である。しかしながら、(5b) (6b)の「ない₁」のような想定述語による名詞修飾が制限的であるとは限らず、また、(7b)の「ない₁」のような確言述語による名詞修飾も非制限的であるとは限らない。(ib)では想定述語「ない」が非制限的修飾を行っており、(iib)では確言述語「ない」「あ_{r-u}」が制限的修飾を行なっている。なお、(8b)の「ない₁」は、(iiib)の「ない」「あ_{r-u}」と同様に、確言述語が制限的修飾を行なっている例である。

- (i) a. #太郎の車が車庫にない。[(ib)の前提となる確言の文として不適格]
 b. 太郎の車を隠せば、彼は車庫にない車を探さだろう。
- (ii) a. 太郎に或るものがない。／太郎に或るものがあ_{r-u}。[(iib)の前提となる確言の文]
 b. 太郎にないものは品格、あ_{r-u}ものは欲だ。
- (iii) a. 人々にそれぞれ何かがない。／人々にそれぞれ何かがあ_{r-u}。[(iiib)の前提となる確言の文]
 b. 一般に、人にないものは品格、あ_{r-u}ものは欲だ。

⁵ 名詞の指示特性は(i)の表のように分類される。

- (5')b. いかなる [ない₁もの] もない₂。
- (6')b. この事典には、一件も [ない₁項目] がない₂。
- (7')b. その [ない₁もの] はない₂。
- (8')b. どの [ない₁もの] もない₂。

言語によっては、現代日本語の想定に相当する叙法と、確言に相当する叙法とを異なる形態の形式で表わし分けることもある。例えば、(9c) (10c)のフランス語文を見られたい(ただし、すべての動詞のすべての時制、すべての主語の人称・数について異なる形態が用意されているわけではない)。

- (9) a. #どこかの秘書がフランス語が上手だ。[(9b)の前提となる確言の文として不適格]
 - b. 私は (誰か) フランス語の上手な秘書を探している。[想定]
 - c. Je cherche une secrétaire qui *soit* forte en français. [soit は動詞 être の接続法現在 3 人称単数, 名詞 secrétaire は非特定]
- (10)a. 私の秘書はフランス語が上手だ。[(10b)の前提となる確言の文]
 - b. 私は (一人の) フランス語の上手な秘書を雇っている。[確言]
 - c. J'ai une secrétaire qui *est* forte en français. [est は動詞 être の直説法現在 3 人称単数, 名詞 secrétaire は特定]

名詞「秘書」の指示特性は、(9b)においては未知の不定、(10b)においては特定の不定である。(11a) (12a)の日本語文はいずれも名詞修飾述語の叙法に

(i)	聞き手にとって		特定	非特定
	話者にとって			
	特定 Specific		定 Definite	
	非特定 Non-Specific	未知 Unknown	—	不定 Indefinite
		任意 Generic	—	

話者あるいは聞き手が、ある名詞が文脈において指示する対象を、その名詞が文脈と関わりなく指示しうる他の対象と識別できる(聞き手については識別できると推測される)なら名詞は特定、識別できない(聞き手については識別できると推測されない)なら名詞は非特定である。名詞が聞き手にとって(必然的に話者にとっても)特定である場合、名詞は定となり、名詞が聞き手にとって非特定である場合、名詞は不定となる。名詞が話者にとって非特定である場合、情報が不足しているために指示対象を特定できないなら未知の不定、話者に指示対象を特定する意思がないなら任意の不定である。詳しくは福田 (2016) を参照されたい。

関して両義的であるが、例えばスペイン語では、日本語文のそれぞれの意味に相当する意味を表す文が、(11b, c)(12b, c)のように互いに異なる形態をとる。

- (11)a. 私は海岸の近くにあ^るr-u 家を探している。〔叙法形式「-u」は確言または想定、名詞「家」は特定の不定（「或る家」）または未知の不定（「どこか〈海岸の近くにある〉家」）〕
- b. Busco una casa que **está** cerca de la playa. [está は動詞 estar の直説法現在 3 人称単数、名詞 casa は特定]
- c. Busco una casa que **esté** cerca de la playa. [esté は動詞 estar の接続法現在 3 人称単数、名詞 casa は非特定]

(和佐 2005: 10)

- (12)a. 私は上手に歌^うw-u 鳥を探している。〔叙法形式「-u」は確言または想定、名詞「鳥」は特定の不定（「或る鳥」）または未知の不定（「何か〈上手に歌う〉鳥」）〕
- b. Busco un pájaro que **canta** bien. [canta は動詞 cantar の直説法現在 3 人称単数、名詞 pájaro は特定]
- c. Busco un pájaro que **cante** bien. [cante は動詞 cantar の接続法現在 3 人称単数、名詞 pájaro は非特定]

(福島 2019: 3)

また、高山 (2005) は、「助動詞「む」の連体用法」を取り上げ、平安中期の文学作品に見られる名詞句「～φ 人」と「～む人」の性質を様々な観点について比較したうえで、「～む人」では「「人」が非現実世界（想像の世界）に位置づけられている」(p. 1) と分析し、「連体用法「む」は非現実性を標示する機能（「非現実標示」）をもち、名詞句の標識として働いている」(p. 1) と結論している。中古日本語の名詞修飾述語において叙法形式⁶ -ム（概言〈Suppositive Mood〉を表す）と -u（確言を表す）とが対立する様相は、現代語における想定と確言の様相と重なるところがある⁷ ((13) (14))。

⁶ 中古日本語の叙法とそれを表す形式については、福田 (2019: 121-143) を参照されたい。

⁷ 高山 (2005) の分析には問題も残る。例えば、(i)では現実の人物を指す名詞を修飾する述語に -ムが現れており、(ii)では非現実の人物を指す名詞を修飾する述語に -u が現れている。

(i) このとまりたま F-a む(2)人 [=中の君] を、同じことと思ひきこえたまへとのめ
かしきこえしに (源氏物語・総角)

(ii) さらに、こころ見れど、御ありさまに似た r-u(2)人はなかりけり (源氏物語・若菜下)

- (13)a. しかわろびかたほな^ら **r-a** **ん**(2)人 [(どこかの) そんなふうに見苦しくまともでない人] を, 帝^{みかど}のとりわき切^{せち}に近づけて, 睦^{むつ}びたまふべきにもあらしものを [名詞「人」は未知の不定] (源氏物語・宿木)
- b. 女御^{にようご}, 更衣^{かうい}といへど, とある筋かかる方につけてかたほな^ら **r-u**(2)人も [まともでない人も (何人か)] あり [名詞「人」は特定の不定] (源氏物語・若菜下)
- (14)a. ながめ出だしたまへるまみ^{ひたひ} 額^らつきのほども, 見知^ら **r-a** **ん**(2)人 [(誰か) 見る目のあ **r-u**人] に見せまほし [名詞「人」は未知の不定] (源氏物語・総角)
- b. 綾^{あや}の装^{よそ}ひにて, 袈裟^{けさ}の縫^ぬ目^{ひめ}まで, 見知^ら **r-u**(2)人は [見る目のあ **r-u**人はどの人も] 世になべてならずとめでけりとや [名詞「人」は任意の不定] (源氏物語・鈴虫)

現代日本語においても、名詞修飾述語の叙法に想定と確言の区別を認めるべきものとする。両者に形態上の相違はないけれども、(5)-(8) (9a, b) (10a, b)のような間接的な方法によって確認することができる。

3.2 想定と被修飾名詞の指示特性

3.2.1 名詞の指示特性が未知の不定である場合、その名詞を修飾する述語の叙法は必ず想定となる⁸。(15b) (16b) (17b) (18b) (19b) (20b)の前提として、それらにおける名詞修飾述語を同じ命題の確言の主節述語に置き換えて出来た(15a) (16a) (17a) (18a) (19a) (20a)は、いずれも不適格な文である⁹。

⁸ この場合、名詞修飾述語に概言を表す叙法形式は現れにくい。

- (i) ?(何か) 深刻-φ{かもしれない／らしい} 問題は起きていますか?
- (ii) ?(誰か) 英語ができる {かもしれない／らしい} 人を連れてこい。
- (iii) ?(どこか) 知らない {かもしれない／らしい} 街を歩いてみたい。

⁹ 確言の文に未知の不定名詞が現れるためには、その文が不透明 (opaque) な要素を伴わなければならない。すなわち、主格名詞の指示対象の非存在を表す ((5b) (6b)), 質問文あるいは確認要求文である ((16b)), 主節述語の動詞がある種の語彙的意味をもつ ((18b)の「探す」), 話者の願望を表す ((20b)) などの特徴である。それらの要素を伴わない確言の文においては、通常は未知の不定指示を行う「何か」「誰か」等の名詞も、特定の不定指示を行うものと考えられる。

- (i) 何かが道に落ちている。
- (ii) 誰かが私に触った。

(i) (ii)の「何か」「誰か」は素性のわからない物／人を指しているが、それらの物／人が「道に落ちている」「私に触った」と事実認定している以上、話者は「何か」「誰か」の指示対象を他の物／人と識別できることになる。

- (15)a. #人々が何かを食べる。
 b. 太郎は (何か) 食べるものを持っているだろう。
- (16)a. #何かの問題が深刻だ。
 b. (何か) 深刻な問題は起きていますか？
- (17)a. #誰かが英語ができる。
 b. (誰か) 英語のできる人を連れてこい。
- (18)a. #どこかの秘書がフランス語が上手だ。(=(9a))
 b. 私は (誰か) フランス語の上手な秘書を探している。(=(9b))
- (19)a. #どこかの店が (この辺で) 裁縫道具を売っている。
 b. この辺に (どこか) 裁縫道具を売っている店があるといいんだが。
- (20)a. #私はどこかの街を知らない。
 b. 知らない街を歩いてみたい
 どこか遠くへ行きたい (永六輔作詞「遠くへ行きたい」)

3.2.2 名詞の指示特性が特定の不定である場合、その名詞を修飾する述語の叙法は想定とはなりえない¹⁰。(15b)(16b)(17b)(19b)(20b)を、それぞれにおける被修飾名詞が特定の不定としか解釈されないように変えると、非文法的な文が出来る ((15'b)(16'b)(17'b)(19'b)(20'b))。

- (15'b). *太郎は或る食べるものを持っているだろう。
 (16'b). *或る深刻な問題は起きていますか？
 (17'b). *或る英語のできる人を連れてこい。
 (19'b). *この辺に一軒の裁縫道具を売っている店があるといいんだが。
 (20'b). *或る知らない街を歩いてみたい。

(18b)は、名詞「秘書」が特定の不定としか解釈されないように変えても、非文法的にはならない ((18'b))。しかし、(18'b)の名詞修飾述語については、

¹⁰ この場合、名詞修飾述語に概言を表す叙法形式が現れうる。ただし、一般に名詞修飾述語に -ウとモダリティ形式 -ダロウは現れにくく、モダリティ形式 -ソウダは現れない。

(i) 或る深刻 {?だろう/-φ-かもしれない/-φ-らしい/*だそうな} 問題

(ii) 或る英語ができる {?だろう/-φ-かもしれない/らしい/*そうな} 人

(iii) 或る太郎が知らない {?だろう/-φ-かもしれない/らしい/*そうな} 街

被修飾名詞の指示特性との関係において、名詞修飾述語に概言の形式が現れうる条件は、確言の形式が現れうる条件と同様と見られる。以下の記述はこの観察に従う。

命題を同じくする確言の文(18'a)を前提と見なすことができ、(18'b)における叙法形式「-な」が想定でなく確言を表わしていることがわかる。

- (18')a. 私の秘書はフランス語が上手だ。
 b. 私は一人のフランス語の上手な秘書を探している。

「私はフランス語の上手な秘書を探している」は、通常は(9b)のように解釈されやすいが、正確には(11a) (12a)と同様に両義的な文である (誰か〈何か〉を雇う〈得る〉ために探している／特定の人物〈物〉の居場所〈在り処〉を探している)。

(21b) (22b) (23b) (24b) (25b) (26b)は、被修飾名詞が特定の不定で、名詞修飾述語の叙法が確言の例である¹¹。それぞれの名詞修飾述語について、命題を同じくする確言の文(21a) (22a) (23a) (24a) (25a) (26a)を前提と見なすことができる。

- (21)a. 私が或るものを食べる。
 b. 私は (或る) 食べるものを持っている。
 (22)a. 或る問題が深刻だ。
 b. (或る) 深刻な問題が起きている。
 (23)a. 或る人が英語ができる。
 b. (或る) 英語のできる人が待機している。
 (24)a. 私の秘書はフランス語が上手だ。(=(10a))
 b. 私は (一人の) フランス語の上手な秘書を雇っている。(=(10b))
 (25)a. 一軒の店が (この辺で) 裁縫道具を売っている。
 b. この辺に (一軒の) 裁縫道具を売っている店がある。
 (26)a. 私はこの街を知らない。
 b. バスを間違えて、いま (或る) 知らない街にいる。

¹¹ 注9(i)(ii)の名詞「何か」「誰か」を修飾する述語の叙法は確言となる ((ib)(iib))。このことから、注9(i)(ii)の「何か」「誰か」が未知の不定でなく、特定の不定であることがわかる。

- (i) a. 何かが黒い。[(ib)の前提となる確言の文]
 b. 何か黒いものが道に落ちている。
 (ii) a. 誰かが体臭が強かった。[(iib)の前提となる確言の文]
 b. 誰か体臭の強い人が私に触った。

3.2.3 3.2.1, 3.2.2 で見たように、被修飾名詞の指示特性が未知の不定、または特定の不定である場合、名詞修飾述語の叙法はそれぞれ想定と確言に決まる。またこれらの場合、名詞修飾は必ず制限的修飾となり、非制限的修飾となる文脈はない。

他方、名詞が定、または任意の不定である場合、その名詞を修飾する述語の叙法は想定とも確言ともなりうる。またこれらの場合、名詞修飾は制限的修飾とも非制限的修飾ともなりうる¹²。

あらかじめここまでの観察をまとめておくと、(表1)のようになる。項目 I-X の例は表の後に示す。

(表1) 被修飾名詞の指示特性と名詞修飾述語の叙法

被修飾名詞指示特性		名詞修飾述語叙法	
		想定	確言 (／概言)
定		I 制限的／II 非制限的	III 制限的／IV 非制限的
不定	話者にとって特定	—	V 制限的
	話者にとって	未知	VI 制限的
		任意	VII 制限的／VIII 非制限的

I の例:

(27) (もし大きいつづら [未知の不定] と小さいつづら [未知の不定] があつたら) 太郎は大きいつづら [定] を選ぶだろう。

II の例:

(28) 太郎の車を隠せば、彼は車庫にない車を探すだろう。(=注4 (ib))

(29) アカシアの雨にうたれて このまま死んでしまいたい
夜が明ける 日がのぼる 朝の光のその中で

¹² 一般に、固有名詞／代名詞は非制限的修飾しか受けないとされる。これに対して三好 (2017; 2020) は、固有名詞／代名詞が制限的修飾を受けていると解される現象を取り上げ、様々な例を指摘している。三好 (2020) は、固有名詞／代名詞が制限的修飾を受けるためには、主節述語が「内包的述語」でなければならないと主張する。三好 (2020) によれば、(i)は制限的解釈を許すが、(ii)には非制限的解釈しか認められないという。

(i) グラウンドを走っている次郎は男前だ。(三好 2020: 23)

(ii) グラウンドを走っている次郎を追いかけた。(三好 2020: 24)

しかしながら、(ii)と同じ主節述語「追いかけた」を持つ(iii)における名詞修飾節 ([……]) は、むしろ制限的修飾とのみ解釈される。

(iii) [階段を駆け下りる] 次郎 (を) ではなく、[グラウンドを走っている] 次郎を追いかけた (のだ)。←1 字右寄せ

この興味深い問題について、本稿では議論する余裕がない。

冷たくなったわたしを見つけて あの人は
涙を流してくれるでしょうか

(水木かおる作詞「アカシアの雨がやむとき」)

III の例:

(30) 太郎にないものは品格, あ ^るr-u ものは欲だ。(=注 4 (iib))

(31) あの大柄な男が太郎で, (あの) 小柄な男が次郎だ。

IV の例:

(32) ないものはない。(=(7b))

(33) 三千代にあ逢って, 云うべき事を云ってしまったた代助は, 逢わない前に
比べると, 余程心の平和に接近しやすくなった。(夏目漱石「それから」15)

V の例:

(21b) (22b) (23b) (24b) (25b) (26b)

VI の例:

(15b) (16b) (17b) (18b) (19b) (20b)

VII の例:

(34) ないものはない。(=(5b))

(35) この事典には, ない項目がない。(=(6b))

(36) 急に雨が降りだしても, 傘を持っている人はあまり困らないだろう。
[野外コンサート会場で]

VIII の例:

(37) もしもパンダがたくさんいたら, 人間は農作物を食い荒ら ^すs-u (あらゆる) パンダに悩まされるかもしれない。

IX の例:

(38) ないものはない (し, あるものはある)。(=(8b))

(39) 一般に, 人にないものは品格, あ ^るr-u ものは欲だ。(=注 4 (iiib))

(40) たばこを吸 w-u 人は肺がんになりやすい。

X の例:

(41) 背の高いキリンは、高所の木の葉を食べることができる。

4. 名詞修飾述語の叙法とテンス

名詞修飾述語の叙法が想定であるとき、そのことは、命題を同じくする確言の述語を主節に持つ文が、名詞修飾述語の前提として不適格となることから知られる。同時に、想定は基本的に、主節の述語の叙法としては認められない¹³。主節述語が基本的に発話時を基準とするテンス (絶対テンス Absolute Tense) をとるのに対して、想定の名詞修飾述語は常に主節時を基準とする相対テンス (Relative Tense) をとるものと予想される。

(42) K 大はフィールズ賞を取った学者を優遇する (予定だ)。(三原 1992: 19)

(42') [従属節の時が発話時より後である場合]

a. *その学者がフィールズ賞を取^るr-u。[(42'b)の前提となる確言の文として非文法的]

b. K 大はフィールズ賞を {取^るった/*取 r-u} 学者を優遇する (予定だ)。
[想定]

(43)a. #誰かが資金を融通してく^られた。[(43b)の前提となる確言の文として不適格]

b. (誰か) 資金を融通して {*く^られた/く^られる} 人を探していた。[想定]

(29)の「冷たくな^るった」も、「冷たくな^るr-u」とは言えない。

三原 (1992) は、次のような「視点の原理」を提唱している。

視点の原理 (tense perspective)

- a. 主節・従属節時制形式が同一時制形式の組み合わせとなる時、従属節時制形式は発話時視点によって決定される。
- b. 主節・従属節時制形式が異なる時制形式の組み合わせとなる時、従属節時制形式は主節時視点によって決定される。

(三原 1992: 22)

¹³ ただし、野田 (1989) の言う「真性モダリティをもたない文」における主節述語の叙法は、想定となることがあると見られる。

(i) まったく同じ品物やサービスなのに値段が違^うw-u。[想定] そんな混乱を消費税が運んでくるのではないか、という不安がささやかれている。(野田 1989: 138)

これに従うなら、(44b) (45b)の名詞修飾述語は「発話時視点によって決定される」絶対テンスの例ということになる(名詞修飾述語・主節述語ともに -タ/ともに -非タをとっている)。しかしこれらの場合、名詞修飾述語の叙法が想定であるため、実際には主節時基準の相対テンスと解釈すべきである。

(44)a. #誰かが傘を持ってきた。[(44b)の前提となる確言の文として不適格]

b. (誰か) 傘を持ってきた人はいましたか? [想定]

(45)a. #誰かが資金を融通してくれる。[(45b)の前提となる確言の文として不適格]

b. (誰か) 資金を融通してくれる人が見つからないかもしれない。[想定]

直示的 (deictic) な時の副詞類と、叙法形式 -タ/-非タとの間には共起制限がある(「*あした来た」「*きのう来る」)。ただしそれは述語が絶対テンスをとりうる場合であり、述語が相対テンスしかとりえない場合、制限は解除されると考えられる。

(46) 来月、あした決勝で勝ったチームが、全国大会に招待される。

(橋本 1995: 16)

(46*)a. *そのチームがあした決勝で勝つた。[(46*b)の前提となる確言の文として非文法的]

b. 来月、あした決勝で {勝つた/*勝 つた} チームが、全国大会に招待される。[想定]

(47)a. #誰かがきのう仕事に来てくれたた。[(47b)の前提となる確言の文として不適格]

b. 先週は、(誰か) きのう仕事に来て {*くれた/くれる} 人を探していた。[想定]

叙法が想定である場合と確言である場合とを含めた、名詞修飾述語全般のテンスについての議論は、別稿に譲ることとしたい。

引用文献

福田嘉一郎 (2016) 「主題に現れうる名詞の指示特性と名詞述語文の解釈」 福田嘉一郎; 建石始 (編) 『名詞類の文法』 pp. 167-184, くろしお出版。

福田嘉一郎 (2019) 『日本語のテンスと叙法: 現代語研究と歴史的研究』 和泉書院。

- 福寫教隆 (2019) 『スペイン語のムードとモダリティ: 日本語との対照研究の視点から』 くろしお出版。
- 橋本修 (1995) 「相対基準時節の諸タイプ」『国語学』181, pp. 15-28, 国語学会。
- 北原保雄 (1981) 『日本語の世界 6 日本語の文法』 中央公論社。
- 三原健一 (1992) 『時制解釈と統語現象』 くろしお出版。
- 三好伸芳 (2017) 「制限的連体修飾節のタイプ分け」『日本語文法』17 (1), pp. 37-53, 日本語文法学会。
- 三好伸芳 (2020) 「連体修飾要素の解釈と述語のタイプ」『日本語文法』20 (1), pp. 20-36, 日本語文法学会。
- 野田尚史 (1989) 「真性モダリティをもたない文」仁田義雄; 益岡隆志 (編) 『日本語のモダリティ』 pp. 131-157, くろしお出版。
- 高山善行 (2005) 「助動詞「む」の連体用法について」『日本語の研究』1 (4), pp. 1-15, 日本語学会。
- 和佐敦子 (2005) 『スペイン語と日本語のモダリティ: 叙法とモダリティの接点』 くろしお出版。

出典

源氏物語: 新編日本古典文学全集 (小学館) に拠る。引用した個所について、論旨に関わる本文の異同は主要諸本に見られない。

Keywords: 想定 確言 概言 不定 相対テンス